近本謙介教授追悼

周藤芳幸

歴史文化学繋文化人類学分野・専門の近本謙介教授（以下、近本さんと呼ばせていただく）は、2023年2月18日未明に渡航先のパリで急逝された。享年、58歳。パリでは、コレージュ・ド・フランスで研究発表をされるご予定だったと伺っている。前夜、シャルル・ド・ゴール空港に到着されたときには、すでに同行者に頭痛を訴えられていたようであるが、あまりに突然のことであり、メールで訃報に接してしばらくの間は、何か悪い夢でも見ているのではないかと呆然とするばかりだった。しかし、部局長としてこの緊急事態に対応するべく、ご遺族をはじめ関係の方々と慌ただしく連絡を取り合っているうちに、次第にこれは受け容れなければならない現実なのだという思いが心の底に重く沈殿していった。現地でのさまざまな手続きやご遺体の搬送等があった関係で、ご自宅近くのつくばみらい市でご葬儀が営まれたのは3月17日になってからのことだった。会場には、近本さんがこよなく愛されていたというブラームスの交響曲第3番が流れていた。ときに厳しくときに穏やかな響きが複雑に交錯し、美しい旋律が深い慈愛と悲痛な諦念を伝えながらも、最後はあたかも天上にのぼるがごとく浄化され、清らかに結ばれるその暖かい曲調は、思えばまさに近本さんのお人柄そのものだった。

近本さんと初めてお目にかかったのは、2015年の晩秋に阿部泰郎先生、安川晴基先生とベルリン自由大学（FU）を訪問したときのことである。FUでの阿部先生のご講演には、日本からも数人の参加者があったが、そのうちのお一人が当時は筑波大学に勤められていた近本さんだった。ほとんど名刺を交換しただけで、落ち着いてお話しをする機会はなかったが、何かの話題でリヒャルト・シュトラウスの「四つの最後の歌」の素晴らしさに触れられていて、深く共感したことだけをよく覚えている。その後、名古屋大学に着任された近本さんには、これを機に大型の科研費に挑戦したいというお気持ちがあったようで、乞われて私が採択されていた基盤Aの申請書をお見せしたこともあった。決してそのためということではなく、あくまで近本さんの研究提案が素晴らしかったからではあるが、近本さんが基盤Aに採択されたときは、我がことのように嬉しかったものである。さらに、私が高等研究院長を務めていた際には、近本さんは梶原義実先生とともに名古屋大学最先端国際研究ユニット（B3）に応募して見事に採択された。このプロジェクトは本部でも高く評価されており、国際卓越研究大学構想で建設される予定のLYKEION（当初はグランドナレッジ研究棟と呼ばれていた）には、近本プロジェクトのために特別の広いスペースが用意されていたほどである。

近本さんの膨大なご業績の学術的な評価については、しかるべき専門の方に委ねたいが、ここで強調しておきたいのは、近本さんが教育、研究、管理運営業務、社会貢献のそれぞれの分野で、実に情熱的にお仕事をされていたことである。近本さんから提出された2021年度の「教

員の教育研究活動報告書」を見ると、教育面では通常の授業に加えて聖徳太子伝絵解きのデジタル資料開発を工学研究科の井手一郎教授と進められている。著書としては、単編著を一冊、共編著を二冊刊行されているが、いずれも500頁を超える大著であり、また、共著とはいえ、内容的にかなりの部分は近本さんが編集の実務を担っていたであろうことが推察される。これらの著書に収録されたものも含めて学術論文が５本あり、この年度には国際学会で３回、国内学会でも２回、それぞれ口頭報告を行なっている。外部資金については、科研費の挑戦的研究（萌芽）と基盤研究 (A) で研究代表者を務め、上述したようにＢ3で「文化遺産と交流史のアジア共創研究ユニット」を率いていた。2022年度に入ってもそのペースは変わることなく、ご逝去に先立つ半年間だけをとっても、10月にはアメリカに出張してハーバード大学やコロンビア大学で研究発表やワークショップの司会を行い、１月にはヨーロッパに出張してハンブルク大学で研究発表、その間はほとんど週末ごとに国内各地を飛び回って、講演や寺院資料の収集などにあたられていた。管理運営面では、パリに渡航される直前の２月15日の教授会において、2023年度から人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センターのセンター長に就任されることが決定されたものの、結局その三日後には幽明境を異にされることになってしまった。このような近本さんの精力的な活動ぶりを、私たちはただただ尊敬と感嘆の眼差しで見守っていたのだが、なぜもっとはっきり無理を控えるよう言って差し上げられなかったのか、後悔の念ばかりが浮かんでくる。

近本さんと最後にゆっくりお話ができたのは、お亡くなりになる３週間ほど前の１月27日の晩のこと。たまたま近本さんと梶原先生それぞれに用事があったことから、研究科長室で落ち合い、寒風が吹き荒ぶ中を東山公園の焼肉屋まで歩いていくことになった。近本さんは、いつものように素敵なマフラーとコートに身を包み、お洒落な帽子を被られていた。お店では名物の塊肉などに３人で舌鼓を打ちながら、いつ果てるともなく美味しい赤ワインを酌み交わしたが、何を話していたのかはほとんど記憶していない。ただただ、心から信頼できる職場の同僚とこうして歓談できることの幸せを満喫していた。そして不覚にも、そのようなかけがえのない関係が突如として喪われることになるとは、夢にも思っていなかったのである。それにしても、先に早世されたインド哲学の畝部俊也さんといい今回の近本さんといい、なぜ運命はこの上なく素晴らしいお人柄の方を狙い澄ましたかのように、冷酷にその命を奪っていくのだろうか。心からご冥福をお祈りするばかりである。

結びにあたり、近本先生から私宛にいただいた最後のメールの末尾を、そのまま引用しておく。今思えば、これこそまさに、私が近本先生にもっと早く伝えておかなければいけなかったメッセージだったのである。

「周藤先生も完全休暇日をできるだけお取りください。難しい状況かもしれませんが、上も下も余計な書類ワークが増えるばかりで、本当に必要なことに割ける時間が益々減っていると思います。くれぐれもお身体第一になさってくださいませ」。